

逐次通訳の基本プロセスの検討

ベルジュロ伊藤宏美

(Ecole Supérieure d'Interprètes et de Traducteurs: ESIT))

In this paper, we examine the first step of conference interpretation training at ESIT: message comprehension and restitution without note taking, in other words, the acquisition of the basic interpretation process. We first present some findings from the recording of two Japanese-French interpretation classes in the first term. The second part is devoted to theoretical analysis based on the Interpretative Theory of Translation (TIT), to which some recent findings in cognitive science have been integrated (Ito-Bergerot, 2005a). In the last part, we propose an Interpreter's Speech Comprehension Model. This model derives from the text comprehension model proposed by Ericsson and Kintsch (1995), which can be compared to Lederer's "unité de sens". We also refer to the comprehension model of Gernsbacher (1990), who stresses the importance of suppressing irrelevant information during story understanding. In our model, the interpreter listening to a speech in X language, in order to translate it into Y language, constructs a situation model, which becomes a multi-layered complex structure of mental representations as the story develops. These mental representations have, under certain conditions, links with either the Y language system or the X language system, corresponding to the interpreter's awareness of specific words in the Y language that come to mind while listening to the speech, or the recall of an expression used by the speaker in the X language. This model can be used to describe students' errors, as well as experts' skillful processing.

はじめに

筆者は ESIT (Ecole Supérieure d'Interprètes et de Traducteurs de l'Université de la Sorbonne Nouvelle - Paris III : ソルボンヌ・ヌーヴェール＝パリ第三大学通訳翻訳高等学院) の日→仏授業を 2 年間にわたって録音し、逐次通訳技術習得過程におけるスピーチ理解と記憶に関わる認知プロセスについて検討した。本稿では逐次通訳技術習得過程の第 1 段階であるノートなしの通訳演習を取り上げ、通訳の基本プロセスの体得とこれに関わる認知プロセスについて検討し、ESIT の通訳理論で明示的に説明していない点を補い、通訳者のスピーチ理解モデルを提案する。

Hiroimi ITO-BERGEROT, "Basic Consecutive Interpretation Process."

Interpretation Studies, No. 7, December 2007, Pages 89-116.

(c) 2007 by the Japan Association for Interpretation Studies

1. ESITにおける通訳訓練の実践と理論

ESITは今年50周年を迎える。同校における初期の通訳訓練法は、第2次世界大戦前の逐次通訳黄金時代からの欧州の会議通訳の伝統に基づいた（ベルジュロ伊藤 2005b）経験的指導法であったが、それを裏付けるための理論研究が70年代に始まり、*THEORIE INTERPRETATIVE DE LA TRADUCTION*（解釈に基づいた翻訳理論。以下TITと呼ぶ）となった。この理論がESITにおける通訳訓練の実践をさらに体系付けるものとなっている（Laplace, 2006）。このようにESIT理論は通訳訓練の実践と切り離せないことを特長としている。

筆者の研究もESITの日本語セクションにおける逐次通訳訓練の実践に基づいたものである。この逐次通訳訓練法が日本の訓練法と大きく異なるものであるので、これについて簡単に述べ、理論との関係を説明する。

1.1 逐次通訳訓練法

ESITにおける通訳訓練の最初の1ヶ月はノートを取らずに2～3分から5分のスピーチを聴取し、その要点をまとめる演習から始める。まず学生の1人にA言語で身近なテーマで話をさせ、他の学生にはスピーチがいくつの部分から構成されるかを考えながら聞くよう指示する。次にスピーチの再現にあたっては、最初に話の構成と要点のみを言わせて構図の把握を確認した後でストーリーを再現させる。この演習は最初は言語変換なしで、日本語のスピーチを日本語でまとめることから始める。学生は往々にしてスピーカーが使った語句をできるだけそのとおりに再現しようとし、特にスピーチ言語をA言語とする学生では、話題が簡単だとすらすらと話の冒頭をほとんどスピーカーが語ったとおりに再現することがある。教師はそれをすぐにさえぎって、むしろ別の語句を使って同じ内容を簡潔に表現するよう促す。スピーカーが使った語句ではなく、内容そのものに注意を集中させるためである。次に日本語のスピーチを仏語でまとめる演習に入る。話の展開の筋道を把握し、できるだけ訳出言語で要点を把握するよう促す。わかったことは楽に思い出せ、他の言語でも自然に表現できることを自覚させる。抜けた点があるときでも、ひとこときっかけになる語が与えられれば、楽に記憶がよみがえることを認識させる。2週目か3週目には要点のみの再現はやめ、いきなり3～4分のスピーチを通して通訳させる。演習に余裕が出てきたら、数値・リスト項目等の細かい情報も記憶するよう努力させる。

ESITの訓練法ではノートなしの訓練は通訳の基本プロセスを体得する段階と位置づけられている。スピーチ聴取時には内容理解、すなわち話者の「言わんとするところ (*le vouloir dire*)」に注意を集中し、かつ、スピーチの構図を把握し、再現時には理解内容を構図を踏まえながら的確に訳出言語で表現するというプロセスである。これがこの後の訓練の土台となり、ノート取り技術、5分以上のス

スピーチを細部まで再現するスキル、さらには同時通訳の訓練もこの基本プロセスに新しいスキルを段階的に付加する形で行われていく。

3 分間のスピーチを記憶で再現するといっても、実際に学生がどの程度できるものなのか、教師はどのような再現を求めるのか、訓練を見たことのない読者には疑問が多いであろう。そこで訓練開始から 4 週目と 7 週目の録音から、学生の通訳と教師のコメントの一部を紹介し、教育現場における演習と理論との結びつきについて概説する。

1.2 ノートなしの演習：授業録音から得られた所見

4 週目の授業は、日本語のスピーチの要点を仏語でいきなり通して訳す演習の段階に入っている。ノートなしで 3 分半の スピーチ 1 がどれだけ再現されたかは 資料 1 を見ていただきたい。いくつか訳し足りないところがあるとはいえ、スピーチの内容はほぼ全部再現されているといえよう。

教師のコメント（筆者注：この時期、日→仏通訳指導ができる通訳者が講師をやめていたため、日本語を解さない仏人教師が日→仏通訳指導を担当している）：仏語で不自然・不適切な表現がある。

Changement d'emploi：仕事を変わるという意味だが、仏語では *emploi* は賃金雇用の場合にしか使わない。同じ会社で異なったポストに就く、あるいは別の雇用主の下に移るといった意味合い。スピーチで取り扱っているのは会社を辞めて自分の店を持つ女性の例であるので、この表現はおかしいと教師は指摘する。

Ouvrir une boutique：仏語では *boutique* という語は小さい商店あるいは服飾品のブティックを指す。「今日のスピーチで取り上げる日本人女性はこういう商店を開く人たちだけなのか」と教師は問う。学生 F1¹⁾ は日本語の「店」には飲食店も含まれ、より範囲が広いことを認める。実際スピーチ 2 で出てくる具体例は喫茶店を開く女性の例である。

いずれも日本語の「転職」と「店を開く」を、文脈を無視した不適切な語句の置き換えで済ませたケースである。最初に教師に指名されて通訳した学生 J1¹⁾ が使った表現を学生 F1 がそのまま使っているのだが、J1 の場合は仏語の表現力不足が一因と考えられるが、同じスピーチを母国語に訳した F1 は、もっと適切な表現ができてよかったはずである。

TIT では理解したことは非言語化されるとするが、学生が直訳的な表現を使うことは多い。外国語習得時に単語リストの暗記、辞書を頼りに読むといった学習法が奨励されることが多いが、これが単語の 1 対 1 対応を反射的に行い、そうし

た訳語を文脈を無視して使う習慣をつける結果となるのであろう。教師はこれを指摘し、原スピーチで使われた表現は意識して忘れるように、訳出言語で意味を的確に表現するようにと繰り返し指導する。通訳をする学生が原語の表現にこだわって不自然な訳出をする、あるいは言葉につまるときには、"Déverbalisez!"、すなわち理解した内容に注意を集中し日本語表現を念頭から排除するようにと教師は要求する。

同じ授業のスピーチ 2は3分50秒の長さで、スピーチ 1で挙げられた小滝さんの転職の話の続きと、その後にもう1人の女性の例が語られる。これを通訳する学生 F1 は、とにかく最後まで話の筋を途切れさせずに伝えることを最優先して、小滝さんの店が60平米であることは言うが、資金源の貯金や借金の金額は省略している。それに引き換え、今回は当てられずに聞き役に回っている学生 J1 は、訳出の努力をしないで済む分、記憶を細部まで呼び起こす余裕があると見られ、教師から何か補足する点があるかと問われると、貯金1200万円、借金400万円を正しく換算して訳出しており、スピーチ聴取段階で、このような数値データもきちんと意識して記憶していたことが分かる。

こうした数値データやリスト項目は、通訳をした学生自身が教師に後から問われて自分で正しく補う場合も授業ではよく見られる。逆に全部のデータを正しく記憶している者がいなくて、複数の学生が部分的にデータを出し合ってすべてがそろう場合もある。記憶攻略としては、60平米の店と聞いたときに自分が知っている60平米ぐらいの物件をイメージしてみるなど、経験や知識に結び付けることが奨励される。これらの語はTITで *mots transcodables* (2.2参照)と定義されているもので、記憶の負担になるため、これらをノートすれば楽であろうと学生に実感させる。

3週間後の授業でもノートなしで通訳演習が行われる。この日は当時ホットな話題であったシアトル WTO 閣僚理事会の失敗について、卒業生がスピーチをしに来た。入学して1ヶ月半の学生 F1 にとっては、これはまだなじみの薄いテーマで、とりわけ国際機関や会議の日本語用語は、新聞で目にしているにもかかわらず消化しきれていない。F1 の通訳は言い直しや繰り返しが多く、思い出せない部分もいくつもある。しかし F1 の記憶が途切れてしまったときに、J1 が「グローバル化」とひとことささやくと、記憶が甦るという例が見られる。記憶内容を呼び出すきっかけとなるこの語を書きとめていたら通訳は途切れなかったであろうと実感させる例であり、こうした体験が次のノート取り演習に結びついていく。

この後、P1 はノートを取っていた第2学年の学生 J2¹⁾ に通訳を求め、F1 が飛ばした箇所が明らかになったところで、F1 にその部分は分からなかったのかと問う。F1 は聞いたときには分かったが思い出せなかったと答える。TIT では瞬間的な理解は関連知識を動員して成立するとするが、F1 にとってこのスピーチは内

容・用語ともに馴染みの薄いものであるだけに、関連知識の動員がスムーズに進まず、1つ1つの情報の理解自体にかなりの努力が必要となり、スピーチの筋道をしっかり記憶する余裕がなかったと考えられる。

この段階から教師は学生に、スピーチテーマについて毎回予習をし、用語に馴染み、関連知識を動員しやすくすることを課す。

2. 通訳の基本プロセスについての理論的考察

以上の所見をふまえて、通訳の基本プロセスについて理論的な考察をする。筆者の研究はTITの記憶モデルに最近の認知科学領域の知見を取り入れるものであるから、最近の認知科学の研究結果を引用しながら、従来のTITの主張を検討・補足する形で理論的考察を進める。

2.1 同一言語でのスピーチ再現プロセス

ノートなしの演習はスピーチ内容を確実に記憶するための訓練であるが、最初に同一言語で行われる演習はベルジュロ伊藤 (2005a)で触れたように Ericsson & Kintsch (1995) の作業記憶モデルでうまく説明できる。スピーチの構図を把握し、これを検索構造 (retrieval structure) とした効果的な符号化の訓練であるといえる。スピーチがいくつの部分から構成されているかを数えながら聞くときに折った指の数が、構図の階層構造の最上レベルのボックスの数に当たり、各ボックスから枝別れして次のレベルが構成されるといった構図がその例となろう。スピーチを再現するときには、まずスピーチの大項目を言わせ、次にサブ項目を言わせるという手順も、構図に導かれた効率よい情報再現を意図させるものだといえる。スピーチ再現時に検索構造のノードが活性化しないとスピーチが途切れたり、一部を飛ばすことになる。しかしキーワードを与えられればすらすらと記憶が甦るのは、キーワードが検索手がかり (retrieval cue) となってノードが活性化したからだといえる。

Ericsson & Kintsch (op. cit.) のモデルは熟達した作業における自動化²⁾された認知処理を説明する作業記憶モデルである。作業記憶には認知作業処理と記憶保持の2側面がある。熟達した作業においてはルーチンで処理される割合が高く、しかも長年蓄積した知識により情報が種々の構造として捕らえられて長期記憶に直接エンコードされるため、短期作業記憶は検索手がかりを保持するだけでよい。即ちスピーチ聴取・理解という作業では、統語規則や成句の使い方などの言語知識、スピーチパターンや典型的なスピーチプランといった談話構造の知識、さらにはテーマに関連する知識、典型的なシナリオ等の知識が構造の迅速な把握に寄与し、内容の理解と記憶を助ける。

しかし、スピーチ理解においてすべてがこうしたプロセスで効率よく処理され

るわけではない。未知の情報を理解したり、2～3分のスピーチの構図を記憶するには努力が必要となる。したがって、スピーチの大半が楽に理解できて、その処理と記憶保持は作業記憶の一部しか使わず、認知リソースに余裕がある限りにおいて、理解に努力が必要な局面にも対応し（例えば意味の不明確な部分を文脈から割り出す）、桁の大きな数字の記憶や、意識してスピーチ構造の把握・保持をするという追加作業ができるのであり、また異なった言語への訳出を意図しながら聞くことも可能となると言えよう。逆に、上述の7週目の通訳演習におけるF1のように関連知識が不十分だと、スムーズな理解プロセスに多少なりとも支障をきたすことになり、記憶が不安定になる。言語知識が不足するときも同様である。

2.2 別の言語でスピーチを再現する

スピーチ言語とは別の言語で内容を再現する演習では、表現言語を変えるとどうプロセスが上述の理解プロセスに付加される。X語のスピーチを聞きながら、検索構造を把握し状況モデルを構築し、5分後に構図に基づいた情報再現をY語とするのであるが、Y語へのスイッチはこのプロセスのどの段階で起こるのであるか。スピーチ聴取・理解プロセス完了後に起こるのであるか、理解プロセス進行中にも部分的であれ起こるのであるか。文書理解モデルに関わる認知心理学実験は単一言語での実験であり、この問いに答えることはできない。

TITではこの問題をどのように取り扱っているであろうか。TITの最初の研究書である *Langage, langues et mémoire* (Seleskovitch, 1975) は英→仏逐次通訳実験を実施し（被験者13人は全員仏語Aのプロ通訳者）、被験者のノート进行分析して、通訳プロセスにおける非言語化の実証を試みたものである。同じスピーチを聞いてもノートは通訳者ごとに異なり、仏語に通訳する時点では、同じ内容を伝えるにしても各自思い思いの表現を使っていること、またノートには英語と仏語の語句が混ざっていることを Seleskovitch は観察した。ノートに見られる英仏語の混在について Seleskovitch (ibid., pp. 161-162) は、非言語化した理解の進行中に、ひとつの意味に形を与えてノートするときには、自分の記憶の手がかりでしかないのだからどちらの言語でもよく、通訳者は訳出時になって初めて聴衆の言語に応じて訳出言語を選び、スピーチとして再言語化をするという仮説を立てている。

他方、Lederer (1981) の「意味のユニット」はベルジュロ伊藤 (2005a) で述べたように上述の Ericsson & Kintsch モデルと類似点が多い。スピーチ理解では非言語化された意味ユニットが次々と意識に上り、より大きなユニットに統合化されていくとするものであるが、非言語化された理解を再言語化して表現するプロセスについては、言語運用力が十分な者であれば瞬間的にできるとしている。「意味のユニット」は同時通訳の分析から引き出されたモデルであるので、スピーチ理解と並行して訳出が行われることが前提にある。

スピーチ理解プロセス自体は同時通訳でも逐次通訳でも同じと考えられるが、スピーチ聴取中に起こる理解の再言語化プロセスについては、逐次通訳ではないのであろうか。上述の Seleskovitch の仮説における再言語化は聞き手に向かって通訳者が発するスピーチを指しているが、その準備段階としての断片的な再言語化についてはどうであろうか。これについて ESIT の実践と理論に関連して次のような指摘ができる。

2.3 スピーチ理解プロセスの進行と訳出言語表現の想起

ノートなしの逐次通訳演習では「キーワードを記憶するように」と ESIT の教師は指示する。原語表現は忘れるようにと指導しているので、このキーワードもスピーチ言語ではないほうがよい。だからといって非言語的なシンボルや概念でキーワードが必ずしも意識できるわけではない。訳出言語でキーワードを捉えることが手近な手法となる。実際、要点を把握するに当たって、できるだけ訳出言語で考えるよう（例えば各構成要素を訳出言語でひとことでまとめてみる）指導されている。したがって、スピーチ聴取進行中にも訳出言語表現に注意を向けることがあるのである。

通訳指導書 (Seleskovitch et Lederer, 1989) のノートなしの演習の章では、聴取進行中に非言語化された理解の一部が訳出言語で表現される可能性については触れていない。しかしノート取りの指導に入ると、できるだけ訳出言語でノートするよう指導すると書かれており、スピーチ聴取進行中にも訳出言語表現を意図することが明確に奨励されている。訳出言語でノートした時のほうが学生がこなれた通訳をすることが経験的に知られているからである³⁾。実際このような指示を受けた学生は訳出言語が母国語である場合はさして抵抗なくこれを実行する。日→英通訳演習でも英語ネイティブの学生がほとんど英語でノートをとっており、日本語の筆記はごく限られているというデータを筆者は持っている。

スピーチのどのような局面で実際に原語の単語・表現がノートされたか、あるいは訳出言語の単語・表現がノートされたかについては、実は Seleskovitch (op.cit., p. 204) のデータで観察できる (資料 2 参照)。逐次通訳実験のデータとして巻末に通訳ノートがいくつか例示されているが、中でも通訳者 B のノートにはフランス語の文章の断片がかなり記されており、しかも訳出時にはこれらの語句がほぼそのまま使われていることさえ見られるのである。通訳者 B は「スピーチはゆっくり目に読まれたので易しかった」と感想を述べている。ただし Seleskovitch (op.cit.) にはこれに関するコメントはない。

他方 Seleskovitch (op.cit.) は実験に参加した 13 人のノートを比較検討して、ある種の情報については全員が必ずノートし、しかもノート項目に対応する語が訳出に認められることに注目した。数字・年月日・固有名詞・リスト項目・専門用

語がそうであり、原スピーチの「a」という語は訳出の「a」に対応すると同定できることから、符号転換的な訳が行われるとして、TIT ではこれらを *mots transcodables* と呼んでいる。TIT の理解プロセスでは、文章1チャンクを構成する数語は融合して非言語化し意味ユニットとなるが、*mots transcodables* は例外で、これらは語としての形を維持して訳出言語の対応語に置き換えられると説明されている。Seleskovitch (op.cit.) の実験データでは、*mots transcodables* については英語でノートした場合と仏語でノートした場合が見られる。固有名詞や各種用語では、英語と仏語では語尾が違う程度でどちらで書いても大差ないと思われるものも認められる(例えば Africa/Afrique のような国名。また B のノートには capitalist, cooperav のように英仏どちらでも通用する省略形も使われている)。リスト項目については、通訳者 A は英語で、通訳者 B と C は一部フランス語で書いているが、後者ではリストは不完全である。B と C のノートはリスト聴取段階で訳語の想起がありえることを示すが、リスト漏れは訳語の想起が努力を要し、認知リソースを欠乏させたことを伺わせる。

Seleskovitch (op. cit., p. 158) は、専門用語などは反射的に訳語がノートできることがあるが、訳語が即座に想起できないときには原語でとりあえずノートしておき、スピーチ終了までノートを取り続ける間も、訳語を無意識に探し続けるものであり、訳出を始めると文章の流れの中で自然に適切な訳語が念頭に浮かぶと書いている。

以上は逐次通訳のスピーチ聴取・ノート段階における訳出言語の想起についての教室における指示と TIT の文献からの引用である。これらはいずれも、訓練生がノートなしで演習するときにも、スピーチ聴取進行中に訳出言語表現の想起がある程度していると推測させるものである。

もとより通訳訓練生でなくても、2ヶ国語を流暢に操る者には、家族や友人との会話で X 語の発話を聞きながら、その同じ会話を Y 語でしていたらこう言うだろうという表現が自然に浮かぶという経験をしているであろう。その場に Y 語しか分からない人がいれば、即座に通訳ができる。会話をフォローしながら同時通訳らしいことさえできる。2ヶ国語を話す者にとって、X 語環境でも Y 語環境でも経験している事象についてなら、X 語を聞きながら Y 語で同じことを表現するのは難しいことではない。ただ素人の場合はどこかで言葉に詰まってしまう、あるいは不自然な表現をしたりするし、どのような話題でもこれができるわけではない。とはいえ、2つの言語環境で生活経験を持つ者なら誰でもある程度はできる言語スイッチ・プロセスが通訳の基本プロセス習得の出発点にあるといえよう。

また、以上の考察から、逐次通訳でもスピーチ聴取時点に内容の把握と並行して訳出言語にスイッチし、理解した意味を断片的に頭の中で表現していることが

あるといえよう。またノートなしの逐次通訳演習で身につける通訳基本プロセスが同時通訳の下地作りとなることにも留意しておきたい。

2.4 非言語化された理解と非言語化を経ない理解

TIT で *mots transcodables* を上記のように扱っているということは、通訳プロセスにおいて非言語化を経ないで言語スイッチが行われる場合があると認めることになる。他方、前述の授業データに見られるように、学生の訳出には直訳的な表現が混入している。すなわち、文脈に則した適切な意味の把握なしに、単語の対応で済ませたと見られる部分があり、理論どおりの非言語化された理解が必ずしも成立していないと考えられる。習得プロセスを分析するに当たっては、理論的に導かれる理想的なプロセスだけではなく、学生の誤ったプロセスについても検討する必要がある。

そこで、まず単一言語でのテキスト理解研究を参考にしながら理解の認知プロセスについて検討し、TIT の *déverbalisation* について考察を試みる。

2.4.1 表面的な理解と深い理解

Kintsch モデルに関連した多くの研究により、理解には表面的な理解と深い理解があることが明らかにされている。Perrig & Kintsch (1985) は仮想の町の様子を24の短文で記述するテキストを作り、被験者に読ませたあと、まずフリーリコールをしてもらい、次に2種類の質問に正か誤かを答えさせた。短文を並べて、同じ文がテキストにあったかを問う質問(1)と、テキストから推測される空間的な位置関係についての質問(2)である。(1)はテキストベースが形成されたことを確認するもので、(2)は状況モデルが形成されていたかを見るためであった。テキストの読み時間が制限された1回目の実験では、(1)の正答率はよかったが、(2)の正答率は劣り、状況モデルにはあいまいなところがあると考えられた。町の様子を若干簡単にし14の短文で記述した2回目の実験では、読み時間も制限しなかったところ、(2)の質問の正答率が高まった。この実験は、テキスト理解で構築される状況モデルは必ずしも完全ではないこと明らかにしている。Zwaan & Radvansky (1998) は視覚イメージタイプの完全な状況モデル構築には時間と認知リソースが必要であると述べている。

他方、テキストを被験者に与える時にどのような指示を与えるかで、被験者の理解の深さが変わることも実験で明らかにされている。Schmalhofer & Glavanov (1986) の実験ではテキストのレジюмеをするという指示を受けた被験者グループでは「言語表層構造」「テキストベース」レベルの心的表象が多く、テキストから知識を得るよう指示を受けた被験者グループでは「状況モデル」レベルの心的表象が多いと認められた。これらの実験が明らかにする表面的な理解と深い理解

は、TIT でいう非言語化がない、ないしは不十分な理解と非言語化された理解に対応する。事前に与えられた指示次第で理解の深さが変わるという実験結果は、通訳指導においても、教師の指示が訓練生の理解の深さに影響することを示唆する。語学演習の一環として行われる英文和訳演習で単語の語意や文法を確認しながら訳すよう指導されれば、表面的な理解に終始しがちである。ESIT の指導法は逆に状況モデルが十分に構築されるような聞き方を明確に奨励するものである。

2.4.2 TIT における "Déverbalisation"

"Déverbalisation" は TIT で重要な概念である。Seleskovitch (op.cit., p16) では *déverbalisation* について *"Le sens que l'interprète retient dans toutes ses nuances pendant que s'égrène le discours (c'est-à-dire pendant que s'énoncent des centaines, voire des milliers de mots) est un sens non verbal."* (スピーチの進行中に、すなわち数百、数千の語が発音されていく間に、通訳者があらゆるニュアンスを捉えて把握する意味は、非言語的な意味である) と述べている。通訳者のスピーチ理解は非言語化したものであるとするこの主張は逐次通訳の熟達者の体験から生まれた信念である。当時の記憶モデルでは、短期記憶の範囲をはみ出す量の言語情報の記憶・再現は説明できない。関連知識と結びついて、非言語的な意味のみが記憶されるとしたのである。しかしこれについて科学的な実証は試みられていない。

Ericsson & Kintsch (op.cit., p. 223) ではテキスト理解や記憶の研究を数多く引用しており、内容の記憶のほうでテキストの文言より長く記憶に保持されると述べ、さらに言語表層構造はセンテンスを読み終ると急速に記憶から失われるが、命題テキストベースはセンテンスを読み終わった後でも検索手がかりにより呼び起こすことができ、他方、状況モデルは記憶痕跡の最も長続きする要素となることが多いと書いている。状況モデルを非言語化された理解、言語表層構造を非言語化されない理解と言い換えれば TIT と一致し、Seleskovitch の主張は「言語的・非言語的知識を十分に持つ通訳者は必ず状況モデルを構築する」と言い換えることができよう。

しかし、その中間の命題テキストベースは非言語化されているのであろうか。例えば

潰す (岩、山小屋) ; 避ける (登山者、岩)

という命題は情景を描きやすく、また登山経験者等では、体感的な心的表象を得ることもできよう。しかし抽象的な文章やメタ言語的な談話から引き出される命題は言語と切り離せるだろうか。非言語化はここからという境界線は引けるだろうか。

Kintsch (1998) は自己のテキスト理解モデルを見直し、言語表層レベルと命題レベルを合わせてテキストベースとした。またテキストベースと状況モデルは別

個のメンタルオブジェクトではなく、同一の心的表象の2つのレベルと捉え、どちらかのレベルが支配的となりえる、それはテキストの性格、読書の状況、読者の知識次第であるとしている。知識が乏しければ文章を文章としてしか思い出せないし、正しく再現できるとも限らない。また状況モデル構築にしても、その内容の充実度・正確度はさまざまであり、どの程度の状況モデルができるかを予言する法則はなく、毎回異なったものとなる、読者のモチベーションや認知リソースの余裕にも左右されると Kintsch は述べている。この考え方は非言語化を考える上で参考になる。

先に見たように与えられた情報を包括した状況モデル構築には時間とリソースが必要である。そのような状況モデルを通訳者の非言語的理解は必要とするのだろうか？通訳者の理解は瞬間的に閃くものとされているので、それほど深い理解でなくてもよいと考えられる。また原語表現が邪魔になって訳出に詰まったときに、意識してこれを記憶から排除するという経験はプロの通訳者にもあるが（こういう体験があるからこそ、非言語化した理解があると実感されるとも言える）、この場合通訳者が必要とする *déverbalisation* は、表現形にこだわった理解からある程度離れた、つまり訳出言語での自然な表現を妨げないところまで非言語化した心的表象であれば十分であると考えられ、命題レベルで足りることもあろう。したがって、*déverbalisation* も言語化／非言語化の2元対立で考えるより、言語分析的な理解を一端として完全な状況モデル構築に至る連続線上で、非言語化の度合いが0から1へと高まるといった考え方を採用するのが妥当ではないだろうか。

実際、スピーチが何分間も続けば、経験豊富な通訳者でも知識が不足する事象にスピーカーが触れることがあり、その場合通訳者の理解は言語分析に依存する度合いが高まる。統計データの引用のように、単純な構文で初出のデータ項目が多数出現する時にも言語変換に頼る度合いが高まる。また前置きなしに別の話題に話が飛んだ時には、文脈が途切れて、聞き手は関連知識を動員できないことがある。これは Lederer (1981, p. 296) が同時通訳コーパスの分析で指摘している点で、話題が変わった時点では同時通訳者は直訳的な表現を使うが、文脈を捉えられるところまで話が進むと関連知識を動員でき、より自然な訳出をすることを観察している。すなわち文脈不十分な局面では、理解が表面的になるということも TIT でも認めているのである。逐次通訳のためにスピーチを聞く時も、話題が変わった直後はこのように表面的な理解となるであろう。しかし聴取が進むと文脈が明確になり理解が深まって状況モデル構築に至ると考えられる。

したがって5分間のスピーチの聴取・理解過程においては、十分に知識があつて、非言語化された心的表象が楽に次々と生まれる局面もあれば、一時的に理解が表面的になる部分もある。すなわち時系列上に次々と生じるマイクロ構造のレベルでは、これが直ちに知識とリンクする場合としない場合とがあるが、 T_N 時点

における理解が表面的でしかなくとも、聴取が進み T_{N+1} で関連知識が動員されると、 T_N の表面的理解が上位のマクロ構造に統合されて理解は深まっていくと考えられる。そしてスピーチ聴取終了時には総合的な状況モデル（必ずしも完全ではない）が構築されると考えてよいだろう。ただしこのようなボトムアップ方式による理解構築では、 T_N 時点の言語レベルの理解は局部的な待ちの手段でしかありえない。知識に結びつかない状態が長引くと理解プロセスは破綻するからである。逆に、通訳者が熟知している話題のスピーチ、あるいは議事進行のようにパターン化した場面では、スピーチの最初のひとことを聞いただけで通訳者は典型的な状況モデルを長期記憶から呼び出すことができる。理解の大枠はこの時点で先取りされ、後はスピーチを聞きながら予測との一致を確認し、変数項に情報をはめ込むだけですむ。このトップダウン方式の場合にも、変数項に入る数字・固有名詞・専門用語等の中には言語的知識しか結びつかないものもある。

ボトムアップ方式とトップダウン方式は二者択一ではなく、ボトムアップ方式が進行中にパターンの知識にリンクするとトップダウン方式が機能し、予測の修正が必要になるとボトムアップで理解構築が継続されるというように、双方が絡み合うと考える。このようにして構築されたスピーチの状況モデルは階層構造をなし、その最上層は総合的な理解に対応し、非言語化されたシナリオのようなものとなっている。その各項目の下にそれぞれ付随情報が位置するが、下位の情報の中には理解が表面的であった構造も含まれるのである。

このスピーチを通訳者が再現するに当たっては、状況モデルの上層部はしっかりと記憶されているが、表面的な理解であった部分は記憶が薄れがちである。したがって、スピーチ聴取時にスピーチ内容をしっかりと把握・記憶しようとするなら、表面的にしか理解できなかった部分についても何らかの記憶の手がかりを短期作業記憶に保持する必要があるが⁴⁾、この場合検索構造が貧弱なので相対的に検索手がかりの数が増える。これは短期作業記憶の余裕が許す限りでしか保持できない。7週目の授業でF1が「聞いた時には分かったが、思い出せなかった」と言っているのは、理解が表面的な部分が多かったため、検索手がかりの数が短期作業記憶で保持できる範囲をこえてしまったと説明することもできよう。

通訳者の記憶は必ず非言語化されるというTITの主張は、このような階層的な状況モデルが構築され（言語レベルの理解に終始した場合は、下位の構造が並んだだけの構図になり、その記憶は不安定である）、上層部は非言語化されていることに対応すると考える。しかし状況モデルの下位の構造を見た場合には局部的に表面的な理解に留まるところもありえる。

2.4.3 原語表現が思い出されるということ

Seleskovitchは通訳者の記憶に残るのは非言語化した理解で、スピーカーが使っ

た文言ではないと主張した。しかし的確な通訳をした後でも、原発言を断片的に思い出せるという経験を通訳者は誰でもしているであろうし、授業録音データのディスカッション部分でも、学生が日本語表現を覚えているという例がいくつも見られる。1語1句違えず文章を再現するわけではないが、スピーチのテーマに関わる用語、印象に残った表現等は思い出せるものである。これについて Seleskovitch (op.cit., p. 163) は、非言語化した理解はどの言語でも表現できるもので、当然スピーチ言語で再言語化できると説明する。Ericsson & Kintsch (op.cit., p. 223) も、テキストの記憶は命題化されており、文章を思い出せるといってもこれは命題から言語知識を使って再構築したものであるとしている。

しかし感動的な言葉あるいは気に障った言動、その他印象に残る語句は鮮明に記憶されるものである。話し手の声、イントネーションが耳に甦ることもある。これは命題から再構築されたものと考えより、長期記憶に直に明確な痕跡を残したものと考えべきであろう。また、スピーチのテーマに関わる語句で繰り返し使われるものは、意識しなくても記憶に残るが、これはスピーチ聴取・理解プロセスで言語知識（長期記憶にある語彙・統語規則等）が動員される過程で繰り返し活性化される語句が記憶に残ると考えられるし、これがキーワードとして短期作業記憶に保持されることもある。そして命題を再言語化するときにも、これらの語句は活性化されやすいといえよう。スピーチ再現演習を同一言語でさせると、学生が原発言をほぼそのまますらすらと言えるのは、こうしたメカニズムによると考えられる。

原スピーチの表面形の一部が記憶に残る、あるいは命題が元の言語に再言語化されて思い出されるというこの現象は、認知リソースに余裕があるときには、非言語化された理解の進行を妨げないはずである。Ericsson & Kintsch モデルでは理解内容を記憶で再現して他人に語るという前提はないので、モデル自体にテキスト記憶を組み入れていない。しかしながら、読みの途中で文章がどの程度記憶されているかという実験を多数引用している。実験結果は言語表層構造はセンテンスを読み終ると即座に記憶から失われるわけではないことを示している。通訳者の場合も非言語化された理解プロセスの邪魔にならずに原語表現の記憶が残ることがあると考えることは妥当であろう。これがスピーチのスムーズな訳出を妨げるときには前述のように意識的に排除する必要があるが、多くの場合、妨げにならないから注意がそちらに向けられないのではないだろうか。

以上を踏まえて、通訳指導で要求する *déverbalisation* は以下の2点に整理できると考える。

1. 貴重な認知リソースは原発言をそのまま記憶するよう努力することに使ってはいけない。しっかりした構成の状況モデル構築に最大限充てるようにする。

2. 努力しなくても記憶に残ってしまった原スピーチの語句が訳出の邪魔をするときには、意識してこれを排除する。

2.5 不必要な活性化の阻止

Ericsson & Kintsch (op. cit., p. 222) はテキスト理解において長期的な記憶痕跡は何らかの構造を形成していると述べている。先に述べたスピーチの構図はそうした構造の簡単な例である。Ericsson & Kintsch (op. cit.)で取り上げている Kintsch の CI (Construction & Integration) モデルもそうした構造を生成するモデルであるが、他の言語理解モデルも使えると Ericsson & Kintsch は述べている。そうしたモデルの 1 つとして、不必要な活性化の阻止を重視するモデルを見ておきたい。Gernsbacher (1990) はテキストを理解する、あるいは数コマの絵物語を理解するという行為の目的を、記憶のノードで構成された心的構造 (mental structure) の構築と捉えている。Gernsbacher のモデルでは、ノードとは、すでに記憶されている情報に該当し、活性化した個々のノードはひとつの知識・経験、あるいは読み取り中の情報に当たる。いくつもの活性化したノードがパターンを作って、ひとつの語の意味、あるフレーズあるいは文章ひとくだりの意味理解に対応する。

Gernsbacher はストーリー理解を基礎 (foundation)、統合 (integration)、変化 (change) の 3 プロセスで説明する。読み手はテキストを読み始めるときには、まずこれから構築する心的構造の基礎を築く。続いて読み取った情報が、すでに構築したベースと一貫性があるなら、これは統合される。逆の場合は別の心的構造の構築が始まる。この過程で活性化の強化と非活性化 (deactivation) のメカニズムが働く。同じ情報の反復は活性化を強めるが、構造構築を続ける上で不必要となったノードは非活性化される。

ストーリー理解の過程で、次々に目や耳に入る情報全てが、構造構築に寄与するわけではない。さして重要でない情報や、誤解を招く情報もある。このような情報に該当するノード活性を即座に抑制 (suppression) することが、効率よい構造構築、すなわち明確な意味の構築に繋がると Gernsbacher は指摘する。Deactivate とは単に活性が減衰するがままにするのではなく、能動的な活性阻止である。テキスト理解力の高い被験者と低い被験者を比較する実験では、後者は主要な構造構築に寄与しない情報を排除しないので、余計な構造・サブ構造を作ってしまう、しかもすでに処理されている情報を忘れがちで、新しく読み取った情報が既存の構造に統合できる場合でも、新しい構造を作ってしまうと結論している。通訳演習でも、言語理解力やテーマ知識が不足する学生の理解の混乱は、余計な構造・サブ構造が整理されないことに起因すると思われる場合が多い。

Déverbalisation も活性化阻止で言い換えることができる。「原語表現を忘れなさい」という指示は、スピーチを聞いたとおりに覚えようとしてしまう学生にとっ

ては、それを意識的に阻止することである。また、心的表象の言語化に当たって訳出言語表現よりもスピーチ言語表現が想起されてしまう時に、それを意識的に排除しようとするのも活性化阻止と捉えることができよう。

2.6 訳出言語表現の想起

ある概念が念頭にあるときにこれを言語化することは、そういう経験が豊富であればあるほど楽にできる。これはエキスパート理論の発話への応用である。あるテーマについて特定の言語で語ったという経験が豊富なら、概念→言語化というプロセスは自動化の度合いが高い。X語とY語を話す者では、表現形には2つの選択肢があるが、通訳をするときには訳出言語が優先される。X語のスピーチ理解プロセスで生じた心的表象をY語で表現するプロセスの難易度は以下の3つが考えられる⁵⁾。

1. そのテーマについてY語で話した経験が豊富：言語表現の想起はほぼ自動化。
2. そのテーマについてY語で読んだり聞いたり受動的な経験は豊富だが、能動的に話したという経験は乏しい：言語表現の想起は可能だが、努力が必要。
3. Y語の受動的経験は限られており、能動的経験はない：言語表現の想起は困難。

スピーチ理解プロセス進行中のY語表現の想起は、1の場合はスピーチ理解のどの段階でも随時楽にできる。2では認知リソースに余裕があるときに限り可能であると考えられる。例えば言語・非言語知識が不足してスピーチ理解に困難があるときには、理解プロセスそのものに多くのリソースを割かなければならないので、Y語表現を長期記憶の深みまで検索する余裕はなく後段階に廻される。またY語の表現の想起に困難を感じてこれに注意が集中すると、スピーチ理解プロセスに充てるリソースが不足する。「xxをどう訳そう」と考えているうちに、スピーチの続きを聞き逃してしまうという危険がある。3のケースでは聴取段階では理解に専念するしかない。

他方、心的表現の言語化においてX語とY語が競合することもありえる。1の場合は、Y語に訳すのだと意識をシフトするだけで競合を避けることができようが、2の場合、スピーチ理解過程で関連知識が不足してX語の言語分析に注意が向けられた場合のように、X語表現が再活性化されやすい状態にある場合や、このテーマについてX語で話した経験が豊富で、Y語よりX語の言語表現が想起しやすいという場合に競合が起こる。3の場合はY語の適切な表現を知らないからX語しか想起できない。2の競合の結果として、あるいは3のケースで、訳出時にX語の表現が想起されると、これを言語的に訳すことになり、聞き手に違和感

を与える訳や不可解な訳になりがちである。これを避けるために、ESIT 指導法では X 語表現は忘れろと指示するのである。

スピーチ理解のさまざまな局面で、Y 語表現がどの程度意識に上るかは、スピーチ理解力と Y 語の運用能力にかかっているといえよう。すなわち X 語の知識やスピーチテーマの知識が豊富であれば理解が早く、十分な認知リソースを Y 語表現の想起に充てられる。そして、Y 語の知識が豊富であれば迅速に多くの表現を想起できるが、Y 語の知識・経験が限られていればこれは制限される。通常訳出言語が通訳者の A 言語である場合は、B 言語である場合より自然にさまざまな表現が念頭に浮かぶものである。スピーチ理解に困難があるときは訳出語表現を想起する余裕は少ないが、断片的なりとも分かったことは A 言語でなら楽に表現できる。しかし理解が不十分なところで原語の単語の辞書的対応語を想起すると、これが理解プロセスをゆがめて誤解につながりかねない。語学学習で単語の一一対応を手がかりに翻訳する習慣がついてしまった者では、このような訳語想起がかなり自動化していることがあり、これの阻止には多大な努力を要するもので、通訳訓練が実を結ばないことが多い。

2.7 訳出プロセス

通訳の目的は訳出であるので、ここで簡単に訳出段階について述べる。TIT では通訳者の発話プロセスは通常の話者の発話プロセスに準じるとしている。Levelt (1988) のスピーチモデルでは、アイデア、言語化 (verbalize)、実行、発話モニタリングの 4 プロセスに分けているが、Levelt の研究は会話における短い発話のやり取りを対象としており、3~4 分のパブリックスピーチにおいて重要となるスピーチ構成という要素がない。そこで Kellogg (1998) の文章生成モデルの「知識の収集」「プラン作り」「文章化」「推敲」の 4 プロセスを参考にして、「知識の収集」「プラン作り」「言語化」「実行」「発話モニタリング」の 5 ステップを想定するのが妥当であると思われる。

通訳演習でスピーカーに指名された学生は、例えば「夏休みに英国の店でアルバイトをした経験を話す」と決めて、いろいろな記憶を呼び起こし(知識の収集)、次に何をどういう順番で話すかを決める。この「プラン作り」ができれば、自分の経験を母国語で話すのであるから、言語化・実行は楽にできる。通常プラン作り段階で主要項目については、一部言語化が始まっているといえよう。キーワードや自分がこだわって使いたい表現等も、断片的に言語化されているものである。そして実際に話し出す段階でその場にふさわしいスタイルに編集して、スピーチが即興で行われることになる。

これを通訳する者は、「知識の収集」と「プラン作り」を自前で行う代わりに、スピーチ理解で得た状況モデル、あるいはシナリオを通訳スピーチプランとして、

これをY語で言語化・実行することになる。スピーチ理解段階ですでにY言語表現の想起がかなりできていれば、訳出時にはこれらを全部そのまま使うわけではないとはいえ、作業負担は軽減され、整った形に編集する、よりの確な表現を使うといった配慮をしながら、即興でスピーチをまとめ上げることができる。そうでない場合は訳出段階の処理作業が増加し、通訳がもたつく、こなれた表現にならない、直訳的な表現が混ざる等、通訳パフォーマンスが低下する。また状況モデルは階層構造をなし、その下位の構造には言語レベルの理解に留まる部分があると 2.4.2 で述べた。これらはマクロレベルで理解されている文脈で意味を推定して訳出表現できることも多い。数値その他のデータやリスト項目を漏らさず伝えたいときには、文脈に即した記号転換・言語分析による訳出で局部的に処理することになる。通訳者が関連知識を持たないから記号転換・言語分析で訳す以外に術はないのである。これは TIT で *mots transcodables* と呼ぶものに該当する⁶⁾。

Kellogg は 4 つのプロセスの中で「プラン作り」がもっとも認知リソースを使うと述べているが、パブリックスピーチにおいても話の構成は重要であり、ESIT ではこれを重視して指導する。それだけにスピーチ聴取時にスピーチ構成をきちんと捕らえることに十分なリソースを当てるのが論旨のはっきりした通訳の条件となる。

3. 通訳者のスピーチ理解モデルの提案

これまで述べてきた授業録音の所見と理論的な考察を踏まえ、通訳者がスピーチを聞くときの認知プロセスについて、ここでひとつのモデルを提案する。このモデルは 2.1 で検討したスピーチ理解プロセスに部分的訳出言語表現を組み入れたものである。

3.1 スピーチ理解構築と X 語・Y 語知識へのリンク

Eriasson & Kintsch (op. cit.) では「言語表層構造」の分析が直に長期記憶の言語的・非言語的知識を呼び起こし、「命題的テキストベース」あるいは「状況モデル」とよばれる心的表象が短期記憶の負荷とならずに形成されてスピーチ理解が構築される。この瞬間的な理解は、長期記憶の活性化されたノードが検索構造を構成し長期作業記憶を形成すると同時に、各ノードに対応する検索手がかりが短期作業記憶を構成していくプロセスで説明されている。スピーチを聞くにつれて長期記憶で活性化されるノードはダイナミックに変化し、それに呼応する短期作業記憶の内容も常時変化しながらスピーチのエピソード記憶を構成する。

筆者が提案するモデルでは、X と Y の 2 ヶ国語を話す者では長期記憶に X 語体系と Y 語体系があり、理解プロセスの各段階で生じるノードにリンクしている長期記憶知識は、非言語的知識に加えて X 語知識が含まれることもあれば (T_N 時点

で生じている心的表象に対応する X 語の語句が念頭に浮かんだ、あるいは T_{N-1} に聴取した語句が記憶に残っている)、Y 語知識のリンクが含まれる(心的表象の Y 語表現形が念頭に浮かんでいる) こともあると想定する。楽なスピーチ理解では状況モデルが易々と構築されると同時に、X 語や Y 語のリンクが、2.6 で見た条件が満たされた時に、ほぼ自動的に生じるとする。

まず、スピーチ聴取と同時に開始される「言語表層構造」の分析により、マイクロ構造が次々と把握されていく課程で、X 語の単語が即座に Y 語の単語を想起させる場合がある。*"Mots transcodables"* が認識された場合がそうであるし、学生がある単語を文脈を考慮せずにその辞書的対応語を想起してしまう場合もそうである。これは長期記憶にある「2ヶ国語の単語リスト」といったタイプの知識が直接活性化されることによる。一方、「言語表層構造」の分析から心的表象が得られれば「言語表層構造」を構成していた語句は忘れてよいのだが、必ずしもそうではなく再活性化されやすい状態に留まることもあると 2.4.3 で述べた。他方、マイクロ構造、すなわち「意味ユニット」に対応するノードが X 語の表現形あるいは Y 語の表現形にリンクすることもあるし、マクロ構造レベルの心的表象が高度な経験的知識と結びつき、これがさらに X 言語体系の知識(その経験を X 語で語る時に使う用語・表現)や Y 言語体系の知識(その経験を Y 語で語る時に使う用語・表現)とリンクすることもある。想起される語句、記憶に残る語句は単語の場合もあれば文節、成句その他断片的な発話である場合もあるとする。Y 語に逐次通訳するために X 語のスピーチを聞く通訳者が、X 語表現は忘れるように、できるだけ Y 語で内容をまとめるようにと意識することは、長期記憶で活性化するノードができるだけ Y 言語系の知識とリンクするよう作業プロセスをリードすることであると考えられる。

ここで提案するスピーチ理解モデルにおいては、長期記憶ノードにおける X・Y 言語系とのリンクはどのレベルにおいても活性化することもあれば活性化しない、あるいは活性化が消えることもあると考える。したがって、スピーチ聴取とともに次々と生じるノードには以下の 4 通りが想定される。

1. X 言語系とのリンクも Y 言語系とのリンクもない。通訳者の理解は非言語化した心的表象である。
2. X 言語系とのリンクが多かれ少なかれある。非言語化した心的表象に X 語の語句・表現が活性化してリンクしているもので、原スピーチの X 語の語句が断片的に記憶に残っている、あるいは心的表象に対応する別の X の語句が想起されている。
3. Y 言語体系とのリンクが多かれ少なかれある。非言語化した心的表象に Y 語の語句・表現が活性化してリンクしたもので、Y 語の語句・表現が断片的に想起されている。

4. X 言語系とのリンクと Y 言語系とのリンクが多かれ少なかれある。非言語化した心的表象に、X 語の語句・表現と Y 語の語句・表現が活性化してリンクしているもので、Y 語の語句・表現が断片的に想起されているが、X 語の語句の想起・記憶も失われていない。

なお、スピーチが新しい話題に移ったときなど、文脈不十分で関連知識が動員できないときの言語分析にたよった理解では、心的表象は命題レベルであると考えてよいだろう。

時系列上のある時点で長期作業記憶を構成するノードはそれぞれこのどれかに該当する。長期作業記憶のノードに対応する短期作業記憶の検索手がかりは、1 の場合は概念シンボル、2 の場合は概念シンボルあるいは X 語の語句、3 の場合は概念シンボルあるいは Y 語の語句、4 では概念シンボルか、X 語・Y 語の語句のいずれかとなる。

上記 4 つのケースに加えて、記号転換や辞書的対応で Y 語の語彙と直接リンクするものがあるが、これらは理解プロセスでは X 語のラベルのついた token として処理され（「小滝さんは[ある]_x面積の店を買うために[ある]_x金額の貯金を崩し[ある]_x金額の借金をした」）、聴取から訳出に至るどこかの時点で X 語のラベルを Y 語のラベルで置き変えると想定する。本稿ではノートなしで対応できるタイプの通訳を取り扱っているので、このほぼ自動化された理解+Y 語想起プロセスに楽に組み入れられるのは、桁の小さい数字、馴染みのある人名・組織名・地名・専門用語等、記憶の負担にならないものに限られる。未知の桁の大きな数字や耳慣れない人名地名専門語等は、それを記憶するだけでリソースを消耗するからである。

通訳者はこのようにスピーチを聞きながら階層構造の状況モデルを構築していく。3~4 分のスピーチを聞き終わった時点では通訳者の理解はストーリーの階層的な概念モデル、あるいはシナリオ的なものとなっている。この階層構造のいろいろなレベルに対応する心的表象には、Y 語系との部分的・断片的なリンクが作られており、一部では X 語表現形とのリンクも再活性化されやすい状態に維持されている。訳出時に検索手がかりによりノードが再活性化すると、活性化が X 語・Y 語のリンクにも及び、X 語の語句が思い出されたり、Y 語の表現が再度念頭に浮かんだりすると考える。ここで提案する理解+Y 語想起モデルは 2.1 で見た理解プロセスと同様、自動化の度合いが高く作業記憶の負担が軽い場合を想定するもので、認知リソースには余裕があり、ゆえに自動化の度合いの低い処理の実行（新しい知識を得るなど）や難しい局面への対応（例えば知らない語の意味を文脈から割り出す）も、この余裕が許す限りにおいて可能である。

3.2 理解の修正と整理

スピーチ聴取時に分からない単語や概念があって、理解が構築されないと、長

期作業記憶には欠落部ができる。また、スピーチ聴取時に単語の誤解があったときや誤った Y 語の語彙が想起されたときには、ノードには不適切な知識とのリンクが含まれる。長期作業記憶はスピーチ聴取が進むとともにダイナミックに変化して、スピーチの論理構造の把握とともに階層構造を形成していくが、このプロセスのある時点で矛盾が生じ、前段階で誤処理があったと意識されると、修正が必要となる(矛盾に気付かなければ誤訳となる)。また、前段階の欠落部をより大きな文脈で推測して捉えて補う場合もある。いずれの処理も追加の認知リソースを必要とするので、このような処理が多いと、理解プロセスは破綻する。

授業 2.04 のスピーチ 1 から例を取れば、学生 J1 も F1 も「普通転職といいますが最初勤めていた会社をやめて別の企業に就職をするということです」と聞いて「転職 = *changement d'emploi*」とリンクさせ、「最近では会社をやめて自分のお店を持つ人が増えている」と聞いて、「店 = *boutique*」とリンクさせ、これが訳出時まで維持されたが、続きを聞いて統合したマクロ構造は「今日のテーマは、会社を辞めて自分の店を持つ日本人女性の話」であり、ここで修正が必要であった。このマクロ構造に仏語表現をリンクさせようとする、転職 = *changement d'emploi*、店 = *boutique* というリンクは邪魔になるからである。これらを意識的に阻止すれば、フランス語らしい自然な表現が想起しやすい。例えば "*Thème d'aujourd'hui : les Japonaises qui quittent un emploi salarié pour se mettre à leur compte.*" となろう。

長期作業記憶の修正や補足があると短期作業記憶の検索手がかりも修正が必要になり、これも追加認知リソースを必要とする。これに欠陥があると、訳出時に記憶を呼び起こせなくなる。

またスピーチ理解プロセスのある段階まで来て、複数の心的表象を統合する状況モデルが作られる時点で想起される Y 語の語句が、前段階で想起した Y 語の語句に取って代わることがある。スピーチの全体像が見えてくるとともに、よりの確な Y 語表現が思い浮かぶという通訳者の経験に該当する場合である。この場合も前段階で想起された Y 語の語句とのリンクを絶つことが、理解プロセスに伴う Y 語想起プロセスを整理することになり、スピーチ聴取終了時に余計な活性が残らず、出来上がった状況モデルにマッチした Y 語リンクのみが維持されることになる。

他方、2.6 で述べたように訳出時に X 語の単語や表現が多く想起されると、直訳的なぎごちない訳になる。したがって X 語とのリンクはできるだけ非活性化することが望ましい。とはいえ、スピーチ聴取中に 1 センテンスを理解したらすぐその語句の記憶を *deactivate* してよいとは言い切れない。スピーチ聴取時に間違った知識とリンク付けがあった、つまり誤解した時や、不適切な Y 語の単語とリンクさせてしまった時に、誤りに気づいても X 語表現を忘れてしまっていたら修正は不可能である。またスピーチの意味が不明確である場合、つまりスピーカー

の用語選択が不適切である、あいまいであるといった場合にも、より大きな文脈で正しい意味を推測できるまで X 語の表現形をある程度保持する必要がある。これは作業記憶にかなりの余裕がないとできない。このような欠陥があるスピーチ（日本人スピーカーにこのような問題が多いと通訳者が指摘していることは近藤 2005 を参照）の理解にはそれなりの経験あるいはスキルが必要なのは、認知リソースに余裕が必要だからだと考えられる。

3.3 通訳エキスパートとノヴィス

筆者のモデルでは、エキスパートはスピーチ理解とそれに並行した Y 語表現の想起を効率よく迅速に行えると考える。すなわち、理解に迷いが少ないので、後続段階での修正や補足が少なく、また早まった Y 語とのリンク付けもしない。言語的・非言語的知識が豊富なのでスピーチの先が読めるからでもあるし、「言語表層構造」の分析段階やマイクロ構造のレベルで問題なく Y 言語表現を想起してよい場合と、してはいけない場合の区別を経験的に知っているということでもある。日本語で「店」と聞いてすぐに "*Boutique*" に結び付けずに、「店」という語から想起される漠然とした概念、すなわち非言語的な心的表象のまま（上記 1 のタイプのノード）にしておけばよいのである。

「普通転職というと最初に勤めていた会社をやめて別の企業に就職をするということです」と聞いたときには、これは日本語での用語定義であり、仏語で必ずしもこれにぴったり対応するものがあるとは限らないという経験的知識に基づいて、「日本語用語の定義」という命題ノードを作るに留めておき（日本語の「転職」という語とのリンクはとりあえず維持する）、仏語表現の想起はせずにスピーチの続きを待つのである。「今日のテーマは会社をやめて自分の店を持つ女性の話」という理解のマクロ構造ができた段階で、例えば「フランス人はこういう場合 "*travailleur salarié / non salarié*"（賃金生活者／自営業者）の対比で捉える」という知識と結びつき、後者に対応するものとして "*se mettre à son compte*", "*devenir son propre patron*", "*avoir son affaire*" といった表現が次々に念頭に浮かぶことになる。ここで「転職」とのリンク付けは絶ってもよい（スピーチのテーマを提示するに当たって「転職」の定義は余計で、これは捨てたほうが仏語では論理的にすっきりすると判断できる）。

いずれにせよ、無駄なリンク付けをしないから後から修正の必要もなく、効率よく適切な仏語表現が次々と思いつく。文脈がはっきりしない時には、Y 言語とのリンク付けをあせらずに追加情報を待つ余裕もある。理解が確実だと自信を持てる時には、必要ないリンクは X 語であろうと Y 語であろうと積極的に deactivate して常時認知リソースに十分な余裕を作っておく。これも経験から得たスキルであろう。

また、ノヴィス（初心者）が "*mots transcodables*" として処理するものの多くは知識になっているので記憶負担が軽減する。通訳エキスパートのスピーチ理解はこのようにスムーズに進み、Y 語表現の断片的な想起も豊富で、同時にスピーチ構成の把握にも十分なリソースが充てられるので、訳出時にはスピーチプランを念頭に置いて、よどみなく細部まで丁寧に訳せるのである。

訓練生の場合にはまだ言語的・非言語的知識が不足する局面があるので、理解に迷いが多く、やみくもな記号転換による早まった Y 語とのリンク付けもしがちである。また意味理解に戸惑う語ほど記憶に残って理解・訳出プロセスの邪魔をするものである。スピーチが易しい時には、後続段階で修正がきくが、スピーチ内容が難しくなったり、新しい作業（例えばノート取り）が追加されたりすると、修正のための認知リソースが不足し理解プロセスが破綻したり、スピーチ内容・構成の把握と記憶が不安定になったりする。しかし習得過程では誤りから学ぶものであり、学生 F1 も J1 も今後日本語スピーチで「店」という語を聞けば、文脈が明確になるのを待って、仏語で "*boutique*" という語を使えるかどうかを判断するであろう。こうした経験の積み重ねも誤処理を減らし、通訳プロセスを効率よく導くスキル獲得につながる。

3.4 ESIT の通訳指導法とモデルとの関係

3.1 で長期記憶ノードの状態には 4 つケースがあると述べたが、ノートなしの訓練は、1 か 3 になるよう意識を集中させることから始まる。学生は 2、すなわち X 語のリンクが多い聞き方をしがちだからである。まず 1 になるよう集中すること、そしてスピーチの構図を把握するにつれて、Y 語あるいはシンボルで検索手がかりを保持するよう努力させるのである。そして Y 語で訳出するときには、把握したスピーチ構図を基に、各項目を Y 語で文脈に最もふさわしい語句を使って（スピーチ聴取中に思い浮かんだ語にとらわれることなく）自然に表現することが求められる。

スピーチ聴取終了時の状況モデルははじめは単純な構造であるが、毎日の訓練で徐々に細密なものとなる。この状況モデルに 2 や 4 のノードがあっても、しっかりした状況モデル構築を妨げないなら、また訳出時に Y 語での自然な表現を邪魔しないなら問題とならない。邪魔をするときには、意識して X 語とのリンクを絶つ (*déverbaliser*) 必要が生じる。

また、理解の迷いを最小化するために、学生は自分の言語・非言語知識の不足を補う努力を毎日続けなければならない。

結語

本稿ではノートなしの通訳演習によって習得される通訳の基本プロセスについ

て、授業録音データを踏まえて理論的に考察をした。その過程でスピーチ理解進行中に Y 語表現が断片的に脳裏に浮かぶ、また X 語表現の一部が記憶が残ることもあるという、TIT がこれまで明示的に取り扱っていなかった側面に検討を加えた。また *déverbalisation* を再検討して、スピーチ理解構築のマクロレベルは非言語化されるが、ミクロレベルでは局部的に表面的な理解に留まるところもあるとしたうえで、通訳訓練生に何が要求されているのかを整理した。最後にこうした考察を総括するものとして通訳者のスピーチ理解モデルを提案した。

このモデルは通訳プロセスにおいて起こりえる種々のケースを想定することにより、訓練生の誤処理が後段階で是正できる場合、できない場合、下手な通訳となる場合を記述することも、またエキスパートの対処法の説明を試みることもできるものである。このモデルにノート取りという作業を組み入れることが、次の課題となる。

著者紹介：ベルジュロ伊藤宏美 (Hiromi ITO-BERGEROT) 1978 年 ESIT 卒業。以来パリをベースに会議通訳・翻訳を職業としている（日本語 A、仏語 B、英語 C）。AIIC 会員。1980 年代半ばより ESIT で仏・英→日本語の通訳演習指導を担当。2006 年 12 月博士号取得。

【註】

- 1) 学生コード：最初の文字は学生の母国語（F=仏、J=日）、次の数字は学年を示す。
- 2) ここで言う自動化とはエキスパートの記憶処理におけるパターン化された迅速な処理を指す。
- 3) Seleskovitch (1975) p. 165 にも同様の指摘がある。
- 4) ノート取り技術を身に付けた通訳者は、短期作業記憶を補うために検索手がかりを書き留める。Seleskovitch が「被験者全員がノートした語」として注目したのはこれに当たると考える。*Mots transcodables* には T_N において言語的理解に留まる情報が多い。
- 5) 本稿では通訳訓練生について述べているが、熟達した通訳者でも馴染みのない専門分野については、2 や 3 のケースが当てはまる。
- 6) *Mots transcodables* についての筆者の考えは、本誌収録の博士論文要旨で述べた。これらを「記号転換で訳せる語」と呼んで、普通の語とは異なった処理をしないと説明するのは、通訳指導において適切ではないと思われる。学生は単に「記号転換で訳せばよい」と誤解して、文脈を考慮せずに辞書的対応で済ませてしまいがちだからである。

【参考文献】

- Ericsson, K.A. and Kintsch, W. (1995). Long-Term Working Memory. *Psychological Review*, 102, 211-245.
- Ericsson, K. A., Krampe, R. Th., & Tesch-Römer, C. (1993). The role of deliberate practice in the acquisition of expert performance. *Psychological Review*, 100(3), 363-406.
- Gernsbacher, M.A. (1990) *Language comprehension as structure building*. Hillsdale, NJ. Erlbaum.
- Kelllogg, R.T., (1998) Un modèle de la mémoire de travail dans la rédaction.. In Piolat A., Pellissier A. (eds), *La réaction de textes, Approche cognitive*, Lausanne, Delachaux & Niestlé, 103-135.
- Kintsch, W. (1998). *Comprehension: A paradigm for cognition*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Kintsch, W., Patel, V., Ericsson, K. A. (1999) The role of Long-term working memory in text comprehension. *Psychologia*, 42, 186-198.
- Laplace, C. (2005). La Genèse de la Théorie Interprétative de la Traduction. In *La Théorie Interprétative de la Traduction. Tome I. Genèse et Développement*. (eds) Israël, F. Et Lederer, M. Paris – Caen : Lettres modernes Minard. 198 pages.
- Lederer, M. (1981) *La traduction simultanée*. Minard, Paris.
- Levelt, W.J.M. (1989), *SPEAKING. From Intention to Articulation*. The MIT press, Cambridge, UK.
- Perrig, W.J., and Kintsch, W. (1985). Propositional and situational representations of text. *Journal of Memory and Language*, 24, 503-518.
- Schmalhofer, F. & Glavanov, D. (1986) Three components of understanding a programmers manual: verbatim, propositional, and situational representations. *Journal of Memory and Language*, 25, 279-294.
- Seleskovitch, D. (1975) *Langage, langues et mémoire*. Minard, Paris. 272p.
- Seleskovitch, D. et Lederer, M. (1989) *Pédagogie raisonnée de l'interprétation*. Didier érudition, Paris/OPOCE, Luxembourg, 273p., trans. by Jacolyn Harmer, as *A systematic approach to teaching interpretation*, 1995, Washington D.C. : RID ; 2^{ème} édition corrigée et augmentée, 2002, 388p.
- Van Dijk, T. A, & Kintsch W. (1983). *Strategies of Discourse Comprehension*. Academic Press. Inc., Orlando, Florida; 418p.
- Zwaan, R.A., & Radvansky, G.A. (1998). Situation models in language comprehension and memory. *Psychological Bulletin*, 123, 162-185.
- 近藤正臣 (2005) 「B 言語への通訳 : 日本の経験—アンケート調査報告」『通訳研究』 No. 5, pp. 261-284. 日本通訳学会

- ベルジュロ伊藤宏美(2005a), 「TIT 通訳理論と作業記憶」『通訳研究』No.5, pp. 53-72.
日本通訳学会
- ベルジュロ伊藤宏美(2005b), 「西欧会議通訳小史」『通訳研究』No.5, pp. 255-260. 日
本通訳学会

資料 1

スピーチ 1

皆様今日は。本日は私が読んだ新聞記事の中でなかなか面白いな、と思った記事について話したいと思います。それは女性の仕事についての話です。え、女性といえどもやはり転職をする、仕事、変えてしまうということがありますね。で、普通転職と言いますと、最初に勤めていた会社をやめて別の企業に就職をするということが、一般的に考える転職ということなんですけれども、この新聞記事では、あの一、次のようなことを言っていました。どういったことかと言いますと、最近ではその会社をやめて自分のマイショップ、自分でお店を持つ人が増えているという内容だったのです。そして、そういう女性はおもに 20 代あるいは 30 代の女性、えー、が多いのだそうです。この傾向はもう本当に最近始まった傾向なのだそうです。会社をやめて自分のお店を持つということにさまざまな理由があります。例えば、今自分がやっている仕事を物足りなかったり、つまらなかったり、あるいは、こういずれは管理職になろうと目指して、えー、その会社に入ったのに、だんだん管理職になることに魅力を感じなくなってしまったり、さまざまな理由が挙げられているみたいです。とにかく、こういった女性達は生き生きと自分が働ける職場としてお店というものに関心を持つようになったのです。というわけで、本日はこのように夢を追いかけて始めた女性達のお話をしていきたいと思います。まず女性 2 人の例を挙げて、具体的にお話をしていきたいと思います。小滝さんという女性のお話をします。小滝さんは 36 歳の女性です。2 年前まで、大手のコンサルティング会社で秘書をしていました。仕事はとても面白くやりがいのある仕事でした。しかし、自分がこれからいったいどんな仕事人生を送っていくか、を考えた時、ふと迷いが生じました。なんか、このまま、仕事は面白いけど、このまま仕事を続けていっても自分が成長していかないような気がしたのだそうです。そしてふと思いついたことがありました。そういえば私には以前から自分の店を持ちたいという夢があったんだ、ということ思い出したわけです。そして、まー、転身をするなら、仕事を変えるなら早いうちに行動を起こさなければならない、思い立ったときにやらないともう 2 度とやれないだろう、と思いました。当然、上司には猛反対にされましたけれども、自分の意志を貫いて、もう本当に勇気を思い切り出して、この会社をやめることにしたわけです。

教師は最初に J1 にノートなしの通訳を求めるが、仏語表現に不十分な点があるので、続けて F1 に同じスピーチの通訳を求めた。ここでは F1 の通訳のみ書き起こした。

F1 の通訳 :	通訳の和訳
<p>Je voudrais vous parler aujourd’hui d’un article de journal que j’ai trouvé très intéressant. Cet article traite des changements d’emploi.... Quelle est la définition habituelle des changements d’emploi ? Le changement d’emploi c’est quitter une entreprise pour entrer dans une autre. Mais la tendance actuelle au Japon... est un petit peu différente.... Le changement d’emploi au Japon en ce moment, particulièrement chez les femmes de 20 à 30 ans consiste à quitter son emploi pour ouvrir son propre, sa propre boutique.... Il y a plusieurs raisons à cela. Premièrement... certaines femmes trouvent leur emploi actuel peu intéressant, ennuyeux.</p> <p>La deuxième raison est... que certaines femmes visent des postes de cadre d’entreprise mais... à un certain point dans leur vie elles se demandent si ça vaut vraiment la peine, est-ce que c’est vraiment intéressant. Et c’est donc... ce genre de... c’est donc cet... ce genre de femme qui cherche à abandonner son emploi pour ouvrir son propre, sa propre boutique.</p> <p>Je vais... vous parler des exemples concrets de deux femmes qui ont justement suivi cet exemple... (leprofesseur souffle : cette voie), cette voie.</p> <p>La première est une femme de 36 ans, madame Kotaki, qui travaillait comme secrétaire dans un cabinet de consultant, de conseil. Elle trouvait son travail intéressant et stimulant mais... à un point donné... à un moment donné elle s’est dit « Est-ce que ça vaut vraiment la peine ? Est-ce que finalement j’ai vraiment envie de continuer dans cette voie ? » Et elle s’est souvenue qu’elle avait un rêve depuis longtemps et ce rêve était d’ouvrir sa propre boutique. Donc elle a exposé ses projets à son supérieur qui s’est opposé... très fort à ce projet, mais,... madame Kotaki s’est dit que c’était le moment ou jamais de changer d’orientation professionnelle et elle a donc... mit beaucoup d’énergie à poursuivre cette nouvelle voie... à s’engager dans cette voie.</p>	<p>本日は、私が読んだ新聞記事でおもしろいと思ったものについてお話しします。この記事は転職を取り扱っています。転職の定義は普通どのようなものでしょうか。転職とは、ある会社をやめて別の会社に入ることです。でも日本の最近の傾向は少し異なっています。今日本では、特に 20 歳から 30 歳の女性では、転職とは会社をやめて自分のブティックを開くことです。その理由はいくつもあります。まず一部の女性は今の仕事あまり面白くない、退屈だと思っています。</p> <p>2 番目の理由は、企業の管理職を目指す女性もいますが、ある時期になると、苦勞して管理職になる甲斐があるのかと疑問に思うようになってきたりするのはです。ですからこうした女性が会社をやめて自分のブティックを持とうとするのです。</p> <p>女性 2 人の具体的な例、こうした例を（教師が「道を」と直す）道を選んだ人についてお話しします。</p> <p>最初の人はいは小滝さんという 36 歳の女性で、コンサルティング会社で秘書をしていました。仕事はおもしろくやりのある仕事でした。しかし、ある時点で「これでよいのだろうか、この道を本当に続けたいのだろうか」と考えるようになりました。そして以前から自分の店を持ちたいという夢があったんだと思い出しました。そこで上司に計画を打ち明け、上司は猛反対しましたがけれども、小滝さんは別の方面の職業に変わるなら今だと思って、勇気を思い切り出して、新しい計画に取り組みました。</p>

資料 2

スピーチ： In those countries where the capitalist powers have left their administrative legacies, it is natural that a capitalist institutional form should be adopted, and yet it has often been found necessary for cooperative holdings to be established, and cooperative marketing schemes, in order to ensure that the economy of the country may go forward.

通訳者 B のノート	Ds ces pays où capitalist P
	laissé heritage
	administratif
	il est normal
	q'y ait structures capit
	et prtant : on a vu des formes cooperv
market	
pr assurer	
↗ economic	

通訳: Car en effet, dans ces pays africains où le capitalisme a laissé son héritage administratif, il est normal que l'on retrouve aujourd'hui des structures capitalistes, et pourtant l'on a vu souvent que, pour assurer le progrès économique, des formules coopératives, qu'il s'agisse de production ou de distribution, se sont implantées tout naturellement. (下線は筆者による)

